漢字を覚えた脳障害児が、言葉を覚えたのはなぜ

子供が初めて「いちご」と漢字を読んだ時、私たちは思わず「えらい。いちごって読めたね」と言って、子供に抱きつくようにして讃めましたが、子供もいかにも嬉しそうににっこりしました。それから後は、カードを見せると、毎回喜んで読むようになりました。

言葉というものは、発せられるや否や消えてしまうので、受け取りにくいものです。その受け取りにくい言葉と物とを結びつけなければならないのですから、言葉を覚えるということは大層むずかしいわけです。

ところが、漢字は消えませんから、字と物とを結びつけることが出来ないということは考えられません。字も物も、どちらも視覚的なものですから、結びつきやすいはずです。

このようなわけで、大脳の中に、物と、物を呼び出す信号である漢字との連絡が出来、その連絡された神経をたびたび使っていますと、その神経が次第に発達し、頭の働きが敏感になっていきます。

こうして働きの良くなった大脳が、受け取りにくい言葉を受け取ることが出来るようになり、次に、その言葉と物との結び付きが出来、言葉が言えるようになったのだ、と私は考えます。

普通児が、何の苦もなく覚えていっている言葉は、重い脳障害児には越えることの出来ない高い障壁なのです。その間に、中間的な踏み台を置いて、それに登れば、それからは乗り越えることが出来る。その中間的な踏み台の役目を果たしたのが“漢字”だったのです。

二人の脳障害児も、48 ページの〇子ちゃんも、漢字を覚えることにより頭の働きを良くし、言葉ばかりでなく、感情や情緒の面、体力や運動能力の面でも、著しい進歩を遂げました。人間のすることはすべて大脳に関係しますが、漢字の学習がこの子たちの大脳を発達させたことは実に大きいものがあったと思います。